

動かしていなければ凍傷に罹ります。

零下四五度以上の寒さの中では、防寒靴、頭巾を被っていても、吐く息で周りが真っ白になります。靴の中で足指を動かして、しばらくぼやぼやしていると鼻がしらが白くなって来ます。「オイ、お前の鼻がしらが白くなって来たぞ、もまなあかん」と。そんなことをしておりまして、シベリアの冬は凍傷に罹る訳です。

そしてシベリアの地に入りますと、十月には、朝起きると氷が張っております。そして一〜四月いっぱい自動車は川の上を走っています。川の水が全部凍ってしまつて、その氷の厚さが五〇〜八〇センチもあります。

内地への帰還は、昭和二十二年六月十二日、ナホトカ出發、「栄緑丸」に乗船、六月十九日に帰宅しました。戦争というものは、人生というものを一八〇度回転させ、悲劇を運んできます。時には、その人生をご破算にするものです。

戦争になると、日本の国は、今度こそは原爆の一つや二つですまんかも分らんような大きな兵器もミサイルも世界の国はたくさん持っております。日本には一個もありません。戦争はあくまでも抑止し、日本の景気の現状をお互いなんとか苦痛を我慢して、次の世代が平和であることを祈っています。

永遠の平和を願ひ

滋賀県 平野 喜三

私は、大正九（一九二〇）年十一月十九日生まれます。昭和十六（一九四一）年一月、関東軍第十二特殊無線隊に入隊しました。幹部候補生を経て、特殊任務としてソ連電波の傍受、暗号解読、無線電波による方向探知などに従事しました。昭和十八年三月、関東軍固定通信司令部付、さらに昭和二十年八月一日、関東軍司令部付となり終戦を迎えました。

そして十月ソ連に抑留となり、ハバロフスク収容所

で山林伐採に従事しました。昭和二十一年二月に収容所を脱出したのですが、同年五月に中国解放軍八路軍に連行、監禁され、ようやく昭和二十一年六月に釈放され、同年八月にコロ島より一般邦人と共に帰国することができました。

以上が私の戦争時の略歴ですが、私は、戦争体験について、少し視点を変えて申し上げたいと思います。

昭和十六年十二月、太平洋戦争が始まりました。小さな日本が米英に対して宣戦しました。当時、これは大変なことになったなと思いつつ、私は昭和十六年一月に徴兵検査を受け軍隊に入りました。六十年経って戦争体験というものは、だんだん静かになってゆきます。また、親子とか兄弟とか遺族の間でも、半世紀以上過ぎますと、だんだん薄れてゆきます。こういう中で、私は一生忘れることのできない体験を致しました。

私も戦場においていろんな悲惨さ、いろんな苦痛を体験しました。しかし私の軍隊は普通の兵隊でなく

て、ちょっと特殊な情報関係の仕事をするようになりまして、非常に自由な行動ができました。そういった関係で、また別の苦勞の体験をしてきました。

私は情報関係で、特にソ連を対象としての情報収集の任務をしておりましたので、非常に単独行動が多かったのです。当時、軍隊教育の一年間は、無線情報、敵の電波を探知する、そして探知した電波を暗合化するというような訓練を受けたのですが、それから先は自分で単独で無線機を持って、国境その他へ行き、情報を取って、日本の参謀本部へ送るといような単独行動が多かったのです。

ちょうど終戦の年の昭和二十年八月ころには、日本は太平洋や沖繩など至る所で玉砕したり破れたりしており、いよいよアメリカが本土へ入ってくる、いわゆる本土決戦だということでした。そして八月一日をもって、関東軍の当初二〇万の精鋭だったものを、八月には半分は日本内地に移動し、銃砲、戦車も移動していました。従って、ここではソ連と戦うような兵力

はない訳です。このように八月一日には、一応戦場を南の方へ下げて、通化というところへ関東軍司令部を持って行って、最後の抵抗戦を新京（長春）にもって行った訳です。

その時に、まず国境付近にいる軍人・軍属、その家族を全部南の方へ下げていったのです。あと国境付近のハルビン、牡丹江には二十七万人ぐらいの開拓団がいた訳で、これらを放っておいて、先の軍人・軍属・家族を全部下げたのです。

そこへちょうど、広島に原爆が落とされ、急遽ソ連は日本と結んでいた不可侵条約を破って四方から雪崩込んで来ました。当然そこでは大きなパニックが起きました。そこには開拓団がたくさんいます。その開拓団には、健康な男性は全部現地召集されていない。残ったのは子供・女、そして年寄りだけです。そしてソ連は一挙に北の方からは満州里、延吉など四カ所から雪崩込んで来たものです。ソ連の兵力は十五万人位でした。

戦車も日本の倍ぐらいある。そして第一戦にはソ連

の歩兵部隊、非常に多くいる囚人部隊で編成した部隊が入って来た。そのソ連の兵隊は非常に柄も悪いし、無学無能の兵隊が多いものですし、そこへ開拓団が下へ下がってくる訳ですから、略奪・暴行が行われた。

そして八月十五日に無条件降伏し終戦です。その時私は、八月一日付で関東軍司令部に転ずるようになりまして司令部勤務になっておりました。その時に列車に乗って何万人という人が、ある限りの列車に乗って、どんどん南下して来ました。ちょうど列車がハルビン、新京、奉天（瀋陽）と来て、そこで終戦のラジオ放送があった訳ですから、その途端に暴動が起きました。中国人が運転していたものですから列車は止まってしまふ。中国人も朝鮮人も、今日から独立したのだという。そうすると日本人は、中国人の迫害を受けます。そして司令部には、あちらでも、こちらでも日本人が迫害を受け助けを求めているなどの電話がどんどん掛ってくるのですけれども、電話を取る者もない。

関東軍司令部は、八月一日には通化に移動していま

す。私たち残っていた新京の司令部では、百何カ所ある通信網を急には移動することはできないので、しばらく残っておりまして。ところが私たちも戦争に負けた経験が全くない。警察もお手上げで、全部逃げてしまい警察権はない。幅を利かせていた憲兵は動けない。本当に満州は建国十数年のものが一瞬にして崩壊したのです。本当に負けるということが、いかに凄いかということを経験しました。もう守ってくれる者は誰もいない、もうやり放題、何もかも盗られてしまう。

私は、とりあえず新京駅に行きました。列車が五本ほど停まったきりです。その列車には開拓団の方が乗って南へ下がる場所です。その後をソ連が追ってくる。そして三日、四日、飲まず食わずで、そして停まった列車の中で略奪に遭っている。

急のことで開拓団は、すぐ荷物を纏めたのですから、ほんの身の回りの物しか持っていない。そして四人も五人もの子供を抱えている。途中で飲み物が無い、暑い、水疱瘡などに罹っている。プラットホーム

へゆくと死んだ児をお母さんが抱いている。そんな場面を見ましたが本当地獄なのです。

これでは何とか食料を確保しなければと、当時新京にあった満鉄倉庫には約五年分ぐらいの食料があると聞いて、とりあえず、その辺にいる兵隊や、まだ銃を持ったこともなく、ただ軍服を着てているに過ぎない兵を集めて、トラックの運転手を探して倉庫に行き、砂糖でもミルクでも手当たり次第に積み込みました。既にその倉庫には中国人が略奪に来ていたので、それをトラックの上から威嚇射撃をしながら新京駅に持って行きました。そこでその食料を皆で食べて下さいと放出しました。それがなくなり、もう一度取りに行きますと、その時には十何棟あった倉庫は燃えていました。

それで私たちは手がつけられずに帰って来たのですけれども、そういうふうにして負けたということは、本当に恐ろしいものです。そして今日、こうして平和と言っていますが、もし何かあって原爆だとかミサイルが打ち込まれて、日本が占領された、と言う場合、

何を持っていても一瞬に無くなってしまふのです。あの大きな満州国は一夜にして無くなったのです。あらゆる行政機関、警察権も権能が一瞬に消えてしまいました。

司令部の隣に中央銀行がありました。その地下には金のインゴットがたくさんありました。お札も山ほどあります。それを全部日本人にばらまいてくれればいいのに、これは渡せぬと銀行の人は頑張るのです。「いくら頑張ったって、あと一週間経つとソ連兵が来るじゃないか、全部持って行かれるじゃないか、全部放出しなさい」と言っても、それができない。そういうような考えられないことがいっぱいありました。

日本が、いろんな統一組織を作って統治したのですが、そういう概念が頭の中に潜在的に残っているのです。何でも日本では、上の命令で動く。ところが私は不思議に思うのですが、戦争が終わって軍隊は無くなって部隊長はまだ威張って部隊長です。

「お前ら、勝手なことしたらあかん、捕虜と一緒になっていくんだ。千人ずつまとめてソ連へ連れていっ

て、ウラジオから帰すから、皆まとまってくれ」とこうです。

私はちょうど調印式に立ち会ったのです。その時に向こうは、そういう提案をしました。私たちはそれを本当だと思っていたのです。

また仕事の都合で新京の放送局、通信施設をソ連に引き渡すために、話をしに来てくれと言われて行ききました。そしてドイツ人が来てまして、そしてドイツ人に聞いたなら「我々は降伏してから全員帰しますと言われて、ソ連に連れてこられて今ここにいます。ドイツ人は、帰らすなんていうことは絶対に嘘だと思う。労働させられるだろう」と私に言っていましたから、私は、これは大変なことだなあと思いました。

いずれにしたところで上に司令官や部隊長など偉い人がいっぱいいる訳です。それが全部集まって、皆で粛々と全員日本へ帰れるのだと言う。そのなかで私は、「満州には開拓団がいて、若い男の人は全員徴集されて、女、子供、年寄りだけなのだから、何とかここにいる兵隊は現地解散にして、少しでも邦人の中に

入って、一緒に連れて帰って欲しい」と私は上の人に強く言ったのですけれども、聞き入れてくれない。

それで約六十万人も日本の兵隊がいて、それに軍属を入れて八十万人以上がソ連に連れて行かれた。そして残ったものは女、子供、引揚げの大変な苦勞がまった訳です。私はこんなことをしていたらあかんと、自分だけでもひとり残って、一人でも多く内地へ連れて帰りたいと強く思いました。

そして私は情報をやっていたということで戦犯に問われました、ソ連からGPUというのが来て、ハバロフスクへ連れて行かれました。そして「お前は情報官をやっておったから約十年刑務所へ行ってもらわなければならぬ」というようなことを言われたのですが、私はロシア語学校へ行っておったのでロシア語ができるということで、山林伐採の班長で行け、と言われて密林地帯へ入りまして、私の一生忘れられないような体験があった訳です。

本当にノルマに追われて、そして零下三〇〜四〇

度、掘って建て小屋の中では本当に隙間だらけ、毛布が一枚で肌着が二、三枚、夜は寒さで眠れない。二、三人固まって寝れば三枚の毛布が重ねられる。それで抱き合って寝ている。ところが栄養失調で、ノルマによってパンが大体一日、今の大きさで言えば五枚切りの一枚、それにお湯に油を落とした顔が映るようなスープ、そこへ加えて食べるのはコーリヤンの糠しかない。コーリヤンの糠は苦くて渋くて癖が多くて食べられません。だから私の体重は七十二キロ位あったのですけれども、その時は四十キロに痩せてしまいました。

それで皆バタバタ、私の班だけで、百八十人ぐらいいたのですが、毎日一人、二人と死んでゆく。体力のないものは次第に死んでいって、収容所全部では一日に多い時で十八人から二十人位死にました。朝ソ連の兵隊がソリを持ってきて死体を積んで裏山へ行くのですが、その裏山へ行くのに、また私たちを連れてゆくのです。穴掘りに行くと、もう固くて掘れません。零下三〇〜四〇度ですと、一メートル掘るには時間がと

ても掛かります。大体二〇―三〇センチつるはしで掘って、それからシャベルで土を除けて、そこへ置くのですけれども、さあ次は俺の順番だなと、自分の入る穴だなど思いながら掘っている訳です。そして翌年、三月か四月になりますと、これが溶けてきて、狼の餌になったと思います。

そういうことで、どうしてもここを逃げ出さなくては、私も二年ほど家に帰っていませんので望郷の念にかられていました。何とか滋賀県まで帰りたいと思って、どうしても脱走してやろうと思いました。そして十日ほど掛かって脱走計画を建てて実行したのです。

この話は省略しますが、私は中国のスイフンガという所へ脱出してきました。ここへ出て来るには夜に歩いて来ます。ソ連領から約八〇キロあるのです。その八〇キロを行くのに、友人と一緒に出て、あるところで友人と待ち合わせたのですが、誰も来ず、一人になってしまいました。

スイフンガの側のスィギョという所へ行ったら驚い

たのです。三歳、四歳、六歳という子供がいるのです。八月にお母さんと別れて、そして迷子に、置き去りにされたり、お母さんが亡くなったりした男の子、女の子なのです。一人の子が私のことを「おじさん」と呼んだから日本人だと分かったのですが、頭の毛はバサバサで色は黒くて垢だらけで、ポロ肌着を来てうろろしているものですから聞きますと、「私の友達も、その辺の馬小屋や豚小屋にいるよ」と言います。

そして私はそれを見に行きました。そして一緒に連れて帰ってくれと言うのですけれども、私自身がいつ何時掴まるか分からないし、何とかして連れて帰りたいなどと思い本当に心が痛みました。

そして私はハルビンから長春へと行き、難民収容所に入りました。

その収容所では、男の人が少なく、両親が亡くなった子供達もたくさんいましたので、いろんな人のお手伝いをしながら、またその子供達の面倒をみながらでした。そして私は新京で何とか生活してゆこうと、思っって仕事をしておりましたところ八路軍に掴まって

しまったのです。

私が今度は新京にいたということが八路軍に分かって、一カ月ほど監禁されました。八路軍の手伝いをしないかと言われたのですけれども、その時私は胸膜炎に罹っていて、とてもそんな仕事はできないと言っておりました。ところが八路軍が来た時に、ちょうど八月十五日の終戦の時に日本の兵隊とソ連が戦って、そして負傷した人は、ソ連は労働に連れて行かないで置き去りにして、それを八路軍に引き渡していたのです。八路軍は国民党軍と内戦をしておりました。その日本の兵隊たちは、新京へ来た時に約八十人ぐらい、もうポロポロの服を来て、手足などに銃撃を受けた障害者です。その障害者の人が飯盒一つぶら下げて歩いていっているのに行き会って「もう君たちは、もう新京まできたのだから逃げなさい。私が逃げる手助けをして上げるから」と言いました。それで逃げて来たのが五人いました。その五人を私は面倒みなくてはいけない。食べさせて行かなければいけない、ということ、その五人と一緒に働いて、どうして内地へ連れて帰るか

を考えた訳です。

幸い、私は理科系でしたので、いろんなことを学校で習っておりました。そして生活するには、中国人の所へ行行ってラジオを修理したり、いろんな電機品の修理などをやって物々交換やお金をもらったりして生活をして来たのです。

その時、戦前満州でもリボンシトロンや三矢サイダーが十五銭ぐらいでした。内地もそれくらいだったと思うのですけれども、それが終戦になってから満州の現地では百円位になった。なぜ高くなったかと言うと、ソ連がサイダー、ビール工場を接収して、その施設を全部持って行ったのです。それでサイダーが作れなくなつて高くなったのです。私は学校でラムネ、サイダーの作り方を理科で習いました。

たまたま先の付き合っていた中国人の一人が、砂糖の一斗樽があると言うので開けて見ますと砂糖じゃない、何か酸っぱい味がすると言うものですから、私が見せてもらうと、それは酒石酸だったのです。ちょうど吉林省は山葡萄が採れるところでして、サイダーの

高いのを思い出して、その中国人から酒石酸を手に入れ、新京の町で重曹を買集めてサッカリンを買って、皆でインスタントのサイダー作りをしたのです。このサイダーを中国人の町で売ったところ非常に受けて、一躍金がどんどん入ってきて、これで服装、持ち物を整えました。そんなことで孤児院にも寄付などで、皆で帰って来ることができました。

本当に戦争というものは、いかに悲惨かということですが、それは戦争をやっている兵隊も悲惨ですが、同時テロで報復を受けているアフガンと同じように、あれだけの犯人を捕捉するために、各国が挙って参加して、その被害を受けるものは一番に国民なのです。国民が一瞬にして爆撃の被害を受けます。

こんなことが本当にいいのか、私は痛切に考えています。自分も捕虜収容所で残酷な目に遭いましたけれども、それ以上に迷惑するのは何の罪もない一般人なのです。

今でも残留孤児が残っているのです。父母と別れた

当時一歳の子は、もう六十歳近くになっているのです。

この戦争とは何だったのだろうか。戦争のない平和な国を作るには、平和を担うには、一体何をすればいいのかということをもっともって考えて行かねばいけないと思います。

三たびの軍務

私の歩んできた道

岐阜県 堂前 寅次

大正五（一九一六）年四月十日、吉城郡宮川村打保で、桜井の家に生まれたが、親同士親交があり、堂前家の子供となった。従って私は物心ついた頃から堂前家の子だと信じつつ成長した。私が小学校六年生の卒業間近に、父母から飛騨中学へ行けと言われ、高山市の伯母の家から通えばちょうどいいとのことであった。しかし、伯母は大変に行儀作法の厳しい人で、そ